

第3セッション

「放送公開講座調査研究報告」

○総合司会

第3セッションのテーマは放送公開講座調査研究報告でございます。

司会は、放送教育センターの福井芳男研究開発部長と、館 昭助教授のお2人でございます。先生、お願いいたします。

○司会（福井芳男・放送教育開発センター研究開発部長）

それでは、調査研究報告、第3セッションのお手元に中間報告が入っていると思います。これを参考にさせていただきたいと思います。

放送教育開発センターの1つの大きな役目は、いかにしてこういった放送利用の大学の公開講座というものが定着し、人々の中に浸透するか、どうやったら浸透できるであろうかということでございます。放送大学の全国化というものを控えまして、この放送利用の大学公開講座というもののあり方というものがだんだん問われてくる、それに向けまして、やはり我々はどういったことをやらなければならないかと。先ほど、ネットワークとかそういったご提言がありました。そういったものをさらに研究して、我々是一个の成果を上げていこうというつもりでございますが、それと同時に現在進行中の調査研究、それについて、きょうはご発表をお願いしたいと思います。

センターでは、館先生がこの研究にかかわっておられましたので、司会を館先生にお譲りすることにいたします。

○司会（館 昭・放送教育開発センター研究開発部助教授）

それでは、ふつつかでございますが、司会を務めさせていただきます。

この研究は、調査研究報告となっておりますが、客員教官と我々センターの教官をグループにいたしまして進めております研究でございますが、4つの大きなテーマを掲げてございます。番組制作、印刷教材、受講生、それから授業への活用でございます。

このテーマに関しましては、實際上全大学がこの全部にかかわって取り組んでいるわけですが、それぞれの調査というのが、実施報告というような形で埋もれないために、研究のレベルでやっているものを重点に、各大学に重点的に取り組んでいただいているということで、決してそのテーマを掲げているところが他のことに関して調査していないということではございません。

そういうことで、今日は番組制作にかかわって、幾つかの大学が重点テーマとして調査研究に取り組んでいただいております。その番組制作、印刷教材、受講生サービス・拡大、授業への活用というのを順番に1項ずつ、去年の成果をご発表いただきまして、あわせて調査研究の講座全体としての振興についても考えていきたいと、そういう趣旨でございます。

まず、番組制作に関する研究ということで、きょうは高岡短大の方にご発表いただくことになっております。ほかに、これを重点テーマとして掲げいただいている大学は新潟大学、信州大学、広島大学でございます。では、高岡短大の坂川先生の方からお願いいたします。

進行は、申しわけないのですが、4つのテーマを先に行ってしまうと、途中休み時間がございません。大変恐縮でございますが、制限時間20分以内というのを各先生に、お守りいただきまして進めていきたいと思っております。

それでは、先生、ひとつよろしく願いいたします。

○高岡短期大学（坂川幸雄開放センター教授）

それでは、効果的な映像提示ということで中間報告をさせていただきます。

きょうお話ししますのは、今、画面に出ておりますような順序で概略をご説明申し上げますが、ポイントはやはり5番目と6番目あたりかと思っておりますので、それまではさっと流していきたいと思っております。

最初に、私どもの学校がやりましたテレビといいますのは、今から3年前が最初でございます。それから私どもの学校は2つの分野の学科がございます、工芸に関する学科と情報に関する学科、2つでございます。それが各学科交代でやるという方向で進んでおりまして、最初は工芸、「工芸の世界」というのが第1回目、昨年度は「身近なコンピューター」ということで情報、今年度は「木からのメッセージ」ということで、また工芸ということで、ようやく3回が済んだところでございますので、ここにおいでになります他の大学さんから比べますというと、開発途上国といえましょうか、そういう状態でございますので、きのう、きょうとお話を伺っております、大変教えられるところが多うございました。きょうも話の後で、もしいろいろ教えていただけるならば、大変ありがたいと思っております。

2番目のテレビ番組の企画・制作方針でございますが、47ページ以降に書いてありますが、それをかいつまんでご報告することになるかと思っております。

高卒者が理解できる程度、率直に言いますと、高等教育のレベルを保ちたいということが1つ、さらに、中堅サラリーマンあるいは主婦の層、年齢的には30歳から40歳代を想定するという方向で進んでおります。

番組とテキストあるいはスクーリング、さらに評価、アフターケアというものを有機的に結びつけていきたいということ。

番組の場合は、まず動機づけということが大事であろうかなと思っております。まず、興味、関心を高めるという方向、さらに学習意欲の高揚と継続、それから基礎的な部分の理解ということに役立つようにということをやっております。

テキストにつきましては、系統的なあるいは体系的な学習が発展できるようにということで編集したい。

スクーリングにつきましては、質疑応答はもちろんですけれども、仲間づくりであるとか、あるいは本学への親近感を育てるということをねらいたい。

評価につきましては、今後の講座をよりよくするための資料にしたい。また、これらを通じまして、本学に対する親派を育てまして、大学開放を地道に進めたいというふうに考えております。

それから、3番目の番組制作上の努力点でございますが、私どもと制作局、これは北日本放送、KNBでございますが、それはお互いに得意な点もあれば不得意な点もございます。はっきり言って、お互いがお互いの弱点をまず意識しようではないかというようなことがございま

して、私どもとしては、まず弱点としましては、初めから30分で進んでおりますが、45分との対比はできない。しかしながら、30分で一体どれくらい盛り込めるのだろうか。また、学校側としましては、映像からということで効果のあるものとないものとの予測がなかなかつきにくい。あるいは社会的なニーズの把握だとか、番組制作手法というものが全く理解ございません。そういう弱点が学校側にはございます。

また、制作局の方に、そういう立場で見ますというと、講義内容というものは余りよく理解はされておらないということでございます。それから、講義を展開される場合の学校での教授といいたいまいしょうか、そういうもののポイントがなかなか把握できないという、お互いの弱点がございまして、そういうことについて、いろいろ回数を重ねた協議を進めまして、お互いに相補う努力を続けたいということでございます。

そういう協議を通じまして、お互いが思いもつかなかったようなことがあったということが多々ございました。

4番目に移ります。工芸と情報という2つの分野が交互につくられているわけですが、工芸分野について言いますと、1回目と今回3回目、つまり2回進んでいるわけですが、各回を通して、講義のポイントあるいは映像のポイントについて、お互いがよく協議しながらつくるとい、先ほど申し上げましたとおりの理解に基づきまして案をつくっていきこうということ。それから、学習効果、つまり意欲あるいは興味、関心というものにマッチできるような、そういうことをねらうとするならば、どうしても学内で講義調でとるよりは、やはり現地での取材ですとか、そういったいろいろな工夫が必要であろう。そっちの方にひとつ力点を置こうではないかということがございました。

それから、講師のワンショットをなるべく避けまして、資料映像を有効に使おうという、そういう1つの講義のスタイルにしましても、場面の構成に大いにワンショットを避けようという工夫もやろうということでございます。これは工芸分野なのでございます。

情報の分野につきましては、これは大変でございまして、昨年やりました「身近なコンピューター」ということでも、そういうテーマを取り上げるにしましても、では一体コンピューターを学習するというのとは一体どういうことなのだと。コンピューターの何を学習するのかと、歴史か、社会か、用語か、あるいは使い方か、いろんなことが考えられます。そしてまた、それぞれの中身も非常に多いわけです。一応使いこなす前提としての知識の習得、それをテレビ講座でひとつやってみようかということに進めたわけでありまして。

まず、最初にやりましたのが、講師が今言いましたような使いこなす前提として、使いこなしたいという人が多いだろうという仮定のもとに、使いこなす前提としての知識の獲得ということをおねらった、テキスト原稿をつくる。今度はそのテキストを基本としまして、局側の方でシナリオをおつくりになる。そういう、まず最初の段階でございまして、あとは話をどういふふうにわかりやすくしたらいいかと。つまり番組の手法を細かくチェックしながらシナリオも完成され、それに基づいてつくられていったわけでございます。

何にしましても、昨年が大変でございまして、30分で多くの内容を盛り込めないということがございますので、ポイントを置くとしても、せいぜい1つか2つしかできないだろうと。その1つ2つのポイントをひとつ絞ってつくっていきこうと。

それから、最初に高卒者であり、30代、40代のサラリーマン、主婦層であるということの受講生を想定しましたが、申し込み者を見ますと、予想どおりのような受講生がございまして、やはり30代、40代のサラリーマン、主婦の人が若干おりまして、大体予想どおりの受講生が得られたということでございます。ただし、その辺の人が多かったとは言いながら、いろいろな方がございまして、年齢、職業、生活様式なんていうのは非常にバラエティに富んでおります。そのすべての人に満足できるようなレベルあるいは学習速度、そういうものに合わせるということは到底不可能でありまして、そこで平均をねらうのか、あるいは低いところに焦点をあわせるのかということが昨年は常に問題になったものです。

いずれにしても、こちらがねらった層から外れる方が結構おるものですから、そういう人たちについては、テキストあるいはスクーリング、アフターケアにまたざるを得ないだろうというふうに割り切っていました。

それから、次の5番目ですが、アンケート調査の結果から伺うことですが、今回のこの中間報告の対象としましたのは、昨年の「身近なコンピューター」と、今年の「木からのメッセージ」、その2カ年分について調査を進めてみましたが、2カ年とも9回、私どもは30分9回ですが、その9回のうち7回以上を視聴したという人が過半数であった。

それから、受講生の感想と理解度ですが、おおむね満足したという人たちが、昨年は90%以上、今年は95%以上、おおむね満足したというレベルから上の人、ほとんどの人が何らかの形で満足しておるということでございます。

それでは、理解はどうかと申しますと、やはり昨年はちょっと絞り過ぎたり、あるいは情報としては最初の経験でございますので、まだまだ工夫をせざるを得ないのですが、理解につきましては、昨年はおおむね理解したという以上の方が78%以上、それから今年は85%以上。

そして、満足したという人と理解できたという人のクロスをとってみますというと、これは当然でしょうけれども、非常に強い相関がございました。

中に期待外れであったけれども満足したというような、そういう答え方をしておる方がございましたので、私ども期待外れというのは非常に気になりまして、一体期待外れというのはどういうところが期待外れなのだろうかということいろいろ考えてみたのですが、こちらの想像の面も含めますと、昨年度は恐らく受講生の方々がコンピューターにかかわっているかかわり方が非常に幅が広いので、そういう幅の広い人が番組を見た結果、自分の期待する内容と一致していなかったという人がいたのではないかと、そういうふうに考えます。ですから、期待外れではあったけれども満足したというような人、そういう層を考えてみますと、昨年度は極端でございましたが、3分の2がそういう感想を持っております。

ことは「木からのメッセージ」ということで、非常に身近な材料を取り上げたせいでしょうか、そういう方は割に少なくても半数以下というふうになっております。期待外れであったという人が割に少なくなっております。

しかし、期待外れであったという人たちだけを取り上げてみますと、その80%以上がそれなりに理解しておるという妙な現象でございました。

それから、番組への評価ですが、これは例えば専門用語を使い過ぎていないだろうかとか、あるいは時間と内容のバランスがとれているだろうか、あるいは内容に応じた資料映像になっ

ているだろうかといったようなことを調査いたしました。それも報告書をごらんいただくとわかるかと思えます。

それから、一番気になりましたのは、テレビというこのメディアの特性といたしまして、そういうことから、これは1方向性ということなものですから、リアルタイムの双方向ということは到底不可能なシステムですから、受講生の疑問あるいは興味、関心といったようなものを、こちらではつくる前提として、それを予想して進まざるを得ない。あらかじめその受講生の疑問なり、興味、関心がわかっておれば、またつくり方も違うのでしょうけれども、それは事前にはなかなか把握できないことです。したがって、それは大胆に予想して、それで教材をつくっていくよりしようがないというふうなことでございます。

やはり30分をスムーズに見ていただくというためには、講義一辺調にならないように、あるいは理論を端的に説明できるような動的なものを割によく使う必要があるのではないかといたったようなこと。それから、適当なテンポが必要である、例えばパネル、写真、あるいは現場写真、現場の撮影、それからナレーション、こういったものが適当なテンポでなければ、やはり見づらいただろう。そういったことが、やっぱり若干アンケートの中から伺えるようなことでございました。パネル、写真、ナレーション、こういったものは非常に適当だけれども、現場の撮影、それが少ないという、そういう反応がございました。やはり30分といえども、そういうものを多くした方がいいのではないかとということです。

時間が30分の番組については長いと反応した人は1人もございませんでした。少ない、30分ではどうも少ないと感じた人が、2カ年度とも大体3分の1余りという傾向でございました。これもやっぱりポイントを多くし過ぎた点もひとつ考えてみなくてはいけないというふうに思っております。

資料映像はやはり新しく、新鮮な感じのものがいいという反応がございまして、ただ、番組をつくる上で、資料映像というのは新しいものがいいのでしょうけれども、昨年場合は、コンピューター絡みでございまして、なかなか著作権の問題ですとか、あるいは現場へ入っていきたくとも、企業秘密というものが絡んできまして、結構壁が厚かった面もございました。

それから、その次の印象深かった番組について取り上げてみたいと思います。印象が深かった番組と申しますと、一言にして言うと、興味、関心があって、内容が理解しやすかったというものになってしまいます。

昨年のコンピューターの場合は、9回のうち4回目、4回目はコンピューターの命令実行の動作、これは普通の人には使っておりましても中身が見えないわけですがけれども、見えない部分の動作を一応模擬的に見せたという回でございまして、これはコンピューターとのかかわりがいろいろ違っているという人であっても、共通の関心のところであったのだらうと思います。

この表をごらんいただきます場合に、私ども勝手に番組構成をこういう側面で考えてみたわけですが、例えば講義調の部分、それから資料にしましても、動きのある資料と静かな、静かな資料というふうな、そういう側面でやりましたので、この3つの側面は重複する場合もあり、これは29分を100%としました。使った時間と括弧の中はパーセントであります、そういうふうを示しております。

その印象度22.3%というのは、受講生の方が最も印象深かった回数を挙げてくださいますと言いました場合に、22.3%の方が第4回のコンピューターの仕組みというところに丸をつけたということでございまして、この22.3%というのは最も高かった部分でございます。男女ともに余り差がございません。

その次は、同じコンピューターの2番目に高かったところでございます。これは約14.9、15%ぐらいの反応です。女性が多かったです。

今度は最も印象の低かったところですよ。進化するコンピューター、これは第2回目です。印象度5.8%。これが最も低い値でございます。

これで言いますと、ごらんのように、学内での講師、講義場面が圧倒的に多い、動的な資料が若干使われていますけれども、ほとんどがワンショットの講義であった。これが最も反応が低かったということでございます。

今年の部分に移ります。最も高かったのは第5回でございまして、これはちょっと特徴の回数でございまして、これは格調をつくるということで、木造建築の非常に格調があるところというので、宮内庁のご協力を得まして、桂離宮のテープをお貸し願ってそれを使ったところですよ。

これがその次に高かったところで12%。これも大体バランスよく行っていると思います。

それから、最も低かったところ、これがバランスは割にとれておるのですけれども、印象度は3%であったと、これが今のところ私どもの頭を悩ましているところでございます、どう判断していいかわからない。ですから、今いただいておりますテーマでやろうとしましたら、まだまだデータが必要ではないかと思えます。まだ、この側面についても、また新たな側面を設けた検討が必要ではないかというふうに思っております。

全く中間的な報告で、またいろいろお教えいただきたいと思えます。

どうもありがとうございました。

○司会 (館)

どうもありがとうございます。

初めに30分番組に取り組んでいただいたということもありますし、番組制作の研究ですので、ご担当いただいた放送局の北日本放送の方、申しわけないのですが簡単にコメントいただければと思います。よろしく願いいたします。

○北日本放送 (稲垣隆也制作局制作部長)

時間がありませんので、簡単にやらさせていただきます。

私ども、今説明になりました3年前から担当しておるのでございますけれども、やはり第1に、わかりやすく親しみやすい番組づくりをしようということをして第1前提にしております。

というのは、大学側とは、いわゆる基本的にはテキストに基づいて構築はしますけれども、活字と映像メディアの違いや、テキストを持っている人が600人程度というふうに限られております。そういったこともありまして、あくまでもテキストを参考にしながらも、テレビ的な部分にポイントを置きまして、番組は番組として独立させる手法をとっております。

そういったことで、テキストと番組とは相互に補完し合うものという基本的な考え方で、いわゆる番組をつくっております。これはあくまでテレビ的な見せ方、切り口を工夫して、やは

りわかりやすく親しみやすいということを前提としております。

そういったことで、視聴率の方なのですけれども、比較的私どもは、ほかの県と比べまして高いところにいるのではないかというふうに思っています。研究調査の期間中、2回目のコンピューターについては9.9%、そして今年度は6.2%とうふうな数字を出しております。

この数字は、私どもは土曜日の朝7時という比較的恵まれた時間に編成をしているということが1つ、それと、やはり番組づくりに当たっては、つくる側の見せ方、いわゆる知らせ方、スポットを十分活用しております。ラジオ、テレビの媒体を持っておりますので、それを使つてのスポットをやると。これは番組予告を兼ねて、それと新聞の、今ここに来ております新潟放送さんもこういうふうにローカル紙に20行程度の見物を出しておられますけれども、私ども各番組について10行程度、これはディレクターにまかせまして10日前に出させるというシステムをとっております。こういったことで、使う使わないは新聞社の判断ですけれども、やはりあらゆるメディアの場に載せるという努力をしております。そういったことから、9.9だとか6.2という、この種の番組にすれば比較的高い位置にいるのではないかというふうに思っています。

以上でございます。

○司会 (館)

どうもありがとうございます。

それでは、センターの浜野先生の方からちょっとコメントをいただきたいと思ひます。

○放送教育開発センター (浜野保樹研究開発部助教授)

番組制作に関する研究は、先ほど館先生の方からご報告ありましたように、信州大学と新潟大学、広島大学もやられておりました、幸いなことに午前中に2大学のご発表がありました。

信州大学は、大学内で双方向の実験もやられておりますので、そういうところを期待したいと思うのですが、ちょっと感想だけ申しますと、番組の長さということが非常にテーマになっております。

ただ、逆に言いますと、大学での標準的な授業の90分とか100分というのも、本当に何の根拠があってそういう時間になったのかというのはだれも答えられないと思うのです。映画では、大体90分を目指して制作する、それは1日の興行数が多くなるとか、生理的な我慢ができる限界で、1時間半だと大体我慢できるとか、非常に単純な理由なのですが、授業に関しては、実のところは何の根拠もないのでないか。ですから、場合場合によるとしか言えないですし、もっと多様な形がとれたらいいなという気がしました。

もう1つは、これは比喩なのですが、リチャードニクソンがテレビ時代に合わなくて選挙に負け、また次に出たときに、広告代理店がテレビキャンペーンでどういうことをしたかというところ、徹底的に彼にテレビでしゃべらさない方法をとったわけです。ただ、彼はすごくすばらしい文章家ですから、彼の文章というのは非常にきれいでいい書き手なのですが、要するに彼の持ち味というのはテレビ的でないところが彼の持ち味だったわけです。

ですから、大学というのは教育者が研究者を兼ねないといけないし、研究者が教育者を兼ねなければいけない。そういったところの持ち味をどうするか。ですから、リチャードニクソンみたいにできるだけ遠くの遠景で撮って、全部女性のナレーションを入れて、顔のアップも撮らなかつたという方法があるわけですが、ですから、場合場合によってその先生の持ち味を生

かすしかないということしか、実は言えなくて、よく百聞は一見にしかずと言っていますけれども、落語家に映像を使ってしゃべろと言ったら、それは全くおもしろくない落語になってしまうわけですから、しゃべるだけが、もしかしたらいい場合もあるし、淀川長治さんみたいにパターンを入れていい場合もある。例えば、テロップをたくさん使うという話もありましたけれども、ものすごく小さい文字のOHPをパタパタ出しても、見慣れない人にとってはただいらいらするだけで、学習を疎外してしまう場合もあるわけですから、先生方の持ち味をどう生かすかということに尽きるものであって、結論がないというのが結論でないかと思います。

○司会（館）

どうもありがとうございました。

ご質問もあると思いますが、ちょっと時間がありませんので、質問等は最後に回させていただきますと思います。

続けて印刷教材のあり方に関する研究ということで、このテーマでは東北大学、信州大学、大阪大学が掲げていただいておりますけれども、きょうは大阪大学の水越先生の方からご報告いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○大阪大学（水越敏行人間科学部教授）

それでは失礼いたします。大阪大学の水越でございますが、先ほど放送教育開発センターの多田教授の方から、大阪大学は信州大学と並んで非常に印刷教材でいいものをつくっているというようなお褒めの言葉がございましたが、もうちょっと私自身反省してみますと、確かに大阪大学の印刷教材というのは、特にテレビに関するものはまことにカラフルであって、しかも同時にそれは市販されて、版を重ねると、版を重ねるだけの単行本として十分売れるだけのものをつくってきております。

ラジオ教材の場合は、言語文化部がつくったものが1つ、それと同じようになっておりますが、そういうようにして、大変版を重ねるいいものをつくってきておるということは、それは多田教授がおっしゃるとおりでございます。

ただ、だから一番放送教材のテキストとしてすぐれていると言えるかどうかと。印刷教材単独としていいものをつくってきたということは、私は自負できると思いますが、放送教材のテキストとしてはどうなのかというふうに関心された場合に、私は胸を張って、我が大学のものは第1級でございますということを使うだけの自信はございません。ではどうやったらいいのかということもわかりません。

今、ここにちょっと出しましたが、放送のテキストというのは、基本的には、1つは読んだり書いたりして、より深く学ぶためにやると。それから、ラジオやテレビの放送内容を補充し、理解を促進するのにやると。3番目は、理解度や問題意識を自己評価するのにも使えると。こんなようなものが含まれておると思います。

ただし、きょうございましたように、放送大学のように単位を認定してやる場合のテキストと、それから大学公開講座の場合、多少違いますので、この1番目ということになると、当然放送大学あたりはこういうことを重視しなければいけません、大学の開放講座のテキストということになりますと、こちらの部分も入りますけれども、この2番とか3番とか、そういったところが入ってこなければいけないというふうに思っております。

そこで、ちょっとこれは私が書いた図なのでございますが、結局これが名古屋大学の先生がおっしゃったようなキーピクチャーというのか、私が言いたい、きょうはこれだけ言えばよろしいわけでございますが、結局真ん中にラジオなりテレビなりがあると。ところが、ラジオなりテレビなりの前に、それから後にどういうものを持ってくるかということが、ある意味では二重性格を持たせるべきだというのが私の結論です。もうちょっとこれを即して申しますと、このラジオやテレビの番組の事前に、いわゆる先行オーガナイザーというような言い方を専門家はしますが、視聴者、見る人の経験の事前の耕しをすると。持っておる経験を整理するとか、我々テレビをわかりやすくつくとか、ラジオをわかりやすくつくとか言いますが、実は、わかりやすいか、わかりやすすくないかというのは、むしろ決定権は見る側に、聞く側にあるわけでございますが、したがって、その人がどういう事前の経験を持っているかということによって内容の理解度は違うわけです。

きょう、新潟大学が見せていただいた映像の中でも長いという人と短いという人がいるわけで、30分が長いか短いかというのは、それは内容にもよりますが、見る人によってかわってくる。

大阪大学がことし歯学部がつくった番組は、歯医者さんが見た場合には、あれで全然短くて足りないと言われるし、一般の人が見た場合には45分は長過ぎると、こういうことになるわけです。

そこで、もう一遍戻りますが、事前の耕しというのを、やっぱりこの番組の内容に事前の耕しをキーシーンで出すなり、キーワードで出すなり、ピクチャーで出すなりして、事前にこういうことだという耕しをやっぱり見る人にさせるようなテキストであってほしい。テキストをぱっと見たら、これから聞く番組の要点、要旨あるいはキーワード、何か写真、そういうものがあって、大体こういうことなのだという事前の耕しをやはりできるようにしたい。

それから、この番組を見たり聞いたりした後に、やはり事後のまとめをする、大体きょうやったのはこういうことなのだ、さらに、より深く学びたい人のためには、こういうような文献があるのだとか、あるいは、さらにまた、きょうこういうことしか言えなかったけれども、切り方を変えればこんなこともあるのだという、いわゆる将来への発展学習的なものを入れる。だから、テキストというのは少なくとも、ここの四角に書いたものの内容をなぞった同じことをだらだら書くだけでなく、事前にあるいは事後にそれがどんなものが載っているかということは、やはり放送教材のテキストとしては決定的に大事なことでないか。しかもそれは、放送による大学講座のときだけに必要なことではなくて、実は日ごろの学校教育においても必要であるし、それからもっと言えば、放送大学のテキストにおいてもある程度言えることではないかというふうに考えますと、この辺の研究が我々はまだ十分やられていない。大阪大学のこれまでのテキストというのは、こんなことを十分に考えてつくったものとは、私は言えないというふうに思っております。

それでは、具体的にどのようなものがそこに書かれているのか。大阪大学のラジオ講座を今回は中心に話をするようにということですので、昨年行いました法学部のもので、少し中心に出してみました。どんなテキストの内容があるかと、ちょっとそれをOHPで次々に出していただきたいと思います。例えば、これはごくこのテキストにも載っておりますように、いわ

ゆるグラフです。これはラジオでございますから、見せることはできませんから、いわゆる検挙人数とか、検挙件数というものをずっとやって、一目でだんだん年を追って来日外国人の犯罪がふえてきておるということを示すもので、こういった種類のものは随所にどこのテキストでも載っておると思います。

それに対して、これはタイムの1989年6月5日号でアメリカと日本との貿易摩擦の問題を報じた記事を全面テキストに載せております。これは別にラジオで放送のときにやるわけではございませんが、向こうではこんな形でニュースにしているのだということを示すためにテキストに載せておるわけでございます。

これは『朝日』と『ニューヨークタイムズ』をやはり5月26日付のスーパー301条でしたか、その問題について、上の方が日本の『朝日』、下が『ニューヨークタイムズ』、こう比較しながら日米の1つの貿易摩擦についての取り扱い方の違い、感覚の違い、文化的な意味も含めて両者のずれを出している。それは、いわば放送で説明されるときにサブ資料といえますか、いわばこれに使っておるということでございます。

これはちょっと「休息室」というのがございまして、1つの放送が終わる継ぎ目のときにこういうものがぱっと載っておると。これは直接番組の内容に関係ございませんけれども、例えばヒューマンライツということについて、ルーズベルト夫人がどういうふうなことを語ったかということ、上にちょっと4、5行説明して、それからフォエア・アフター・オールというところからずっと人間の普遍的な人権というのはどこに云々と、極めて身近な、お隣から、工場から自分の学校から、あらゆるところに実は人権の問題というのはあるのだというような話をルーズベルト夫人が言った言葉をそのまま載せております。これは人権について語った後、ちょっといわば休息室というような形の中で入れておる言葉というふうに見てください。

これは実は見ていただいてもわかるように、1つだけが、これは法学部ものではございませんで、基礎工学部がつくった「見る」というテレビ番組の中に載せたもので、デジタル画像というものが量子化分割数によって違ってくるのだということを出しておりますが、これはテレビでやる番組に、なおかつこういうふうな印刷教材にこのようなデジタル画像の違いを載せておまして、これはテレビの画像でも説明するのですけれども、一応まとめてa・b・c・d・e・f・g・hと載せてやっている。だからこういうふうにして動画で見せるものについても、テキストはやはりこんなものをもう一度フォローして出しておると。こんなことでございます。

以上のような、見ていただきましたような形で、大阪大学といたしましても、法学部、あるいは今年の経済学部、あるいはテレビでやった歯学部、私どもや事務局の面々はこういった課題をいただいておりますので、少しでもテキストの内容と放送番組とのあり方について、事前にあるいは事後に担当の講師たちと話し合いをいたしまして、そして私も及ばずながらテキストを見せていただいてコメントをつけたりしたことはいたしました。

しかし、まだ放送のテキストと、それからいわゆる放送番組とのあり方、特に音だけしか頼りにできないラジオにおいて、どういう効果的なずれが両方にあつたらいいのかということについては結論を出すに至っておりません。

そこで、ちょっと私どもだけで話してもだめですので、実際にそれを利用してくださった視

聴者の方々にスクーリングの後で少しアンケートをとりました。それがお手元の資料の中にご
ざいまして、ページ数で申しますと、大阪大学の資料は30ページからございます。30ページご
ざいですが、31ページ以降に、いわばスクーリングの終了後に実際に聞き取りをした人々の意
見がそこにまとめてございます。

きょうは、時間の関係で、そのポイントだけを少し説明させていただきたいと存じます。

31ページのテキストの内容についてどういうことを言っているかということですが、後でお
読みいただいたらよろしいかと思いますが、例えば一番上の丸でございしますが、各章の最後に、
その章の要点を箇条書き等にまとめれば、さらに理解が深まると思う。7というのは、7人の
人が言っておるということでありまして、10名を選んで聞き取りをしておりますので、7名とい
うのは非常に多い、7割というような数字になるわけでございます。要するに、もう一遍後に
箇条書きにサマライズして、理解の増幅に役立ててくれという意味でございします。

それから、3つほど飛びますが、法学あるいは政治学のラジオ講座であるからこそ、文章だ
けでなくて写真や図や表などを多用して説明する必要があると思うと。だから、法学のラジオ
講座だからこそ、むしろ新聞記事とか、あるいは写真とか、できるだけグラフィックなものを
載せて理解を少し補足するようなものが欲しいということをおっしゃっています。

それから、ずっと飛びまして、テキストの構成等についてというところですが、一番上です
が、要点項目及び重点語句については、アンダーラインを引くか、ゴシック体にするか等の措
置をとってほしい。つまり、やっぱりキーワードは鮮明にわかるようにして下さい。できれば
一番初めに括弧つきで、きょうのキーワードはこんなことだというように並んでおいて、そし
て本分の中にまたゴシック体が出てくるといいというようなことをおっしゃって、やはり
最初の事前の耕しと言いましたが、キーワードについて少しほかのものと区別するような措置
をしてほしい。

それから、メモをとるように少し余白をあけてほしいというようなことです。

それから、ちょっと飛びますが、英文には、やっぱり訳文をつけてほしいと。ルーズベルト
夫人の言葉だという形で6行ほど載せるだけでは困るので、それはどういうことを言っている
のかということを中心に全訳でなくてもいいけれども、要旨をそこへ載せておくというぐらい
の親切はしてほしいということでございます。

それから、次の32ページに参りますが、やはり一般の人たちはNHK市民大学講座のテキスト
というようなものをすぐに頭に置きまして、それとの比較で物を言っておりますが、やはり本
分と注釈を同じページの別枠扱いにして、下の方に注釈がちょっとつくとか、そういうような
形にして、本分と同時に注釈が同じページに来て、後ろの文末に来るということを一々めくら
ずに、別枠に注をつけるという形のレイアウトはできないかというようなこととか、それから
「休息室」はぜひつけてほしいと、そういうのがあって、かえって本題から少し外れた方がよ
かろうということですよ。

それから、テキストと放送番組の関連ですが、やっぱりこれはどのくらいずれた方がいいか
ということなかなか難しいのですが、一番下に書いてございますが、放送内容3分の3とす
ると、テキストに記述された内容が3分の1で、テキストに記述されていないがそれに関連す
るような内容が3分の2と、それぐらいの比率がいいというのが大阪の人の意見として多うご

ございました。

そんなようなことが、大体聞き取りでとれたこととございます。

それから後は、具体的にアンケートをやりまして、その集計結果が数字で全部項目ごとに出ておりますので34ページにアンケート項目の質問項目がございまして、はい・どちらともいえない・いいえという形で、これは特定の人聞き取りではなくて、その視聴者に対してとったアンケート結果が並んでおりまして、主要なものだけをそこへとってまいりました。ごらんいただくとよろしいかと思えます。

最後に、訂正でございますが、35ページの上から5行目のところで、ちょっと私どもの印刷のミスでございますが、4行目から読みますと、ラジオという聴覚メディアの特性を全面に出したり(Q17)、その結果、番組とテキストとがぴったり一致しない(Q19)のようなことについては、意見が強く出しと書いてありますが、意見が3つに分かれており、三分しておりと、3つに分かれておりというふうにご訂正いただきたいと思えます。

今のことちょっと補足いたしますと、ラジオでございますから、例えばニュース性とか、演説とか、音楽などの録音を入れてもっと変化に富んだラジオ番組にしたらどうかとか、あるいはラジオ番組とテキストの内容は余りぴったりせずにはずれた方がいいとか、そういうようなことについて意見を求めたところ、それは意見は必ずしも1つに収斂していない、3つに、3つにということはイエス・ノー・どちらともいえないというのに分かれておるということでございます。

したがって、結論だけ一言申しますが、少なくとも今回、法学部がやられたラジオ番組について言う限りは、見られた、それを聞かれた方はテキストと内容とがぴったり一致することを求めているわけではございませんで、むしろ効果的なずれが欲しいということと、もう1つは理解度を助けるようなキーワードなり、あるいは巻末へのまとめが欲しいというようなことについては言っておりますが、しかし、もう少し突っ込んでいくと、ずれとはどのくらいずれたらいいのかとか、あるいはいわば単に理解を助けるだけでテキストはいいのかと。そうではないとすれば、一体より深く発展したり、読んだりする人のために、そういうモチベーションを促すとすれば、どういうことにしたらいいのか。さらには、どういうターゲットの人に対しては、特にこういうコメントが必要だということまで深く突っ込む必要があるのかないのか、この点については、まだ十分研究はいたしておりませんが、今後、少しそういった問題をラジオだけではなくて、テレビについてもあわせて、むしろテレビについてこそやるべきではないかというふうにご考えております。

○司会 (館)

どうもありがとうございました。

それでは、このテーマに関しましては、多田先生の方からコメントをお願いいたします。

○放送教育開発センター (多田 方研究開発部教授)

多田でございます。

今朝ほど信州大学の白井先生の方にちょっと質問申し上げまして、そのときもやはり問題になりました放送教育におけるテキストの位置づけということについて、今まではとかく相互補完性を大事にするとか、相互補完しなければいけないというような表現で言われてきたわけで

すが、およそ具体性に欠けまして、きょうの水越先生のお話で大分はっきりしたという気が私はいいたします。

特にラジオ、テレビを真ん中に置きまして、事前の耕し、それから事後のまとめ、発展と、そういうようなスキームで何か教材づくりがそこから発展していけば、かなりすっきりした線が出てくるのではないかという気が私はいいたします。

今朝ほどと絡みますが、そのほかに印刷教材のあり方に関する研究ということで、大阪大学のほかに信州大学、それから東北大学がノミネートされておりまして、今朝の信州大学の例と、それからただいまの水越先生のお話が絡むのでございますが、そのずれる場合に、どれぐらいずれたらいいかというような問題が出た場合に、どうしても民間出版社と絡みますと、委員会の方の意向と出版社との意向がやはりかなりぶつかる部分が出てくるのではないかと思います。

私自身としましては、放送利用の大学公開講座が民間出版社と絡むと、ジョイントするというような、私は大変結構なことではないかというふうに考えているわけです。

と申しますのは、これも繰り返しになりますが、やはり出版編集のプロがそこに介在することによりまして、内容が非常に読みやすくなるということでございます。これは文章だけに限らず、見出しのつけ方、あるいは字の配列とか、そういうものも含めて、非常に内容が向上するということが1つございます。

それから、やはり市販するということによりまして、200とか300の限られた受講生だけではなくて、いわば全国にマーケットが広がると、それが結局公開講座にフィードバックしてくるという需要がございます。

それから、それぞれ地域の一流の研究者の方が半年ご苦労するわけでございますので、それが200、300の受講生だけで終わるとするのは、ある意味では社会的な損失でございます。そういうような意味で、民間出版社とタイアップして、放送利用の大学公開講座の印刷教材ができるということは、私は大変結構だというふうに考えていたわけでございます。

ただ、今のよう、やや学問的といいますか、もうちょっときちっと放送教育における放送教材と印刷教材の関係という視点から考えますと、やはり水越先生がおっしゃったような、別の観点からの、やっぱり研究の積み重ねというのがどうしても必要になってくる。そういうような意味では、アンケート調査などもやはり積み重ねというべき仕事ではないかと。その結果、何らかの形でマニュアルと申しますか、テレビあるいはラジオの場合は印刷教材は少なくともこういうことについて気をつけて、それを踏まえてつくっていった方がいいというようなガイドラインのようなものができてくれば、大変結構だと思います。

そういうような意味で、法律だけに限らず、次はたしか経済だったと思いますが、そういうようなことでも同じような観点で、アンケート等を重ねていただければと思います。

ちょっとつけ加えになりますが、先ほど、信州大学につきましては、昭和60年に始まってから、ずっと民間出版社とタイアップしておりますので、その問題点をいくつかまとめてご報告いただければ大変ありがたい。今朝申し上げたことと重なります。

それから、最後には東北大学でございますが、これは東北大学はちょっと今の大阪大学、信州大学と非常に、ある意味では反対の方向をとっております。デスクトップ・パブリッシングと申しまして、パソコンと周辺の機器、プリンターとか、あるいはイメージスキャナーなどを

使いまして、要するに個人で机の上で、図版とか写真も入れた形でレイアウトもできて、印刷の版下までつくれるというシステムでございます。

非常に自分の思いどおりのページがつかれる、それからコストが外に出しませんので安い、安いといってもある意味ではただになる。扱う人の人件費だけになるわけでございます。それから、外に出しますと、スケジュールがなかなか決まっていけないのですが、要するに自分で机の上でつくれてしまう、時間が節約できる。そのほかに、コンピューターですから、入れたデータを2次利用、3次利用、いろいろ使えるわけでございます。

そういうような意味で、デスクトップ・パブリッシングというのは、非常に日本で盛んになってまいりまして、ただこれは非常に問題がございまして、外に出してしまいますと、先生方はそこで仕事が切れまして、編集とか印刷という面倒なことは外に出るわけでございます。しかし、デスクトップ・パブリッシングですと、そういう、いわば今まで外のプロに任せていたことが中に入ってくるという関係になりまして、実際のデスクトップ・パブリッシングでの印刷をだれが責任を持ってやるかというのは、管理上非常に難しい問題が出てくるのではないかという気がいたします。

萩原先生にもいろいろお話を伺っているのですが、要するに、分業で成り立っておりました執筆、編集、印刷というのを、信州大学、大阪大学の場合は、むしろ民間出版社の外に出すわけでございます。ところが、東北大学の場合はうちにそれを取り込むということで、また新しい問題が出てくるという感じがいたします。

そんなことで、デスクトップ・パブリッシング、また新しいプログラム言語のポストスクリプト、一番ポピュラーな言語を使って、この後やっていきたいというようなお話しでございますけれども、その点につきましては、来年度の報告書でぜひ読ませていただければ大変ありがたいというふうに思っております。

○司会（館）

どうもありがとうございました。

これで2テーマ終わったのですが、お休みなしにあと2つ、受講生とその授業活用を続けたいと思いますので、ひとつよろしく願います。

受講生の拡大の方は金沢大学の方をお願いしております、よろしく願います。安井先生です。

○金沢大学（安井武司工学部教授）

金沢大学の安井でございます。

私どもの資料は、お配りした中の16ページから始まっているのですが、最初に申しわけないのですけれども、訂正をひとつお願いをいたします。

26ページでございます。26ページの表の中の数字でございます。上から4行目のところ、左側には市町村・公民館の広報等というふうに書いてあります。そのところが-0.582というふうに書いてありますが、これはゼロが1つ抜けております。-0.0582でございます。申しわけありませんでした。

それでは、本題に入らせていただきます。

私どもの方にいただいているテーマは、受講生拡大に関する研究ということでございますが、

受講生拡大というのは、放送の講座が始まって以来、どの大学でも随分努力をされている分野でございます。

しかしながら、私どもはどちらかといいますと、長い間学校教育ということで、対面教育をやっております。それから、この放送教育というのは、資格とか大人数制度、この辺は昨日のお話で、そういうふうになる可能性も近い将来にはありそうだというお話がありましたが、きょう現在ではありません。それで、不特定多数の視聴者を対象とするということなものですから、昨日ないしは今日のお話の中にもございましたように、視聴者の把握というのが非常に難しい問題がございます。これはある程度イメージがわいてこない。やはり拡大に関することに対するモーションが、どうも力が抜けるといいますか、力点があやふやになるという問題があらうかというふうに思います。

それで、こうした放送公開講座のそうした量的な目安としましては、ご存じのように、視聴の登録者といいますか、実際にはテキストの購入者というような、この数字が非常に有力なデータとして我々も使っているし、お使いいただいているかと思えます。基準のデータになるかというふうに思います。

これよりか、もう少し質的な内容を含んだものとしては、いわゆるスクーリングに出席された数。これはスクーリングに出席されるものですから、ある程度の理解度だとか、満足度というようなものもある程度は情報として得られるかというふうに思います。

一方で、そうしたことでなくて、いわゆる視聴率の方から推計される数がございます。

この3つ、先ほどのお話でいくと、高岡のように9%台という驚異的な視聴率もお聞きしているのですけれども、量的な判断の基準がされるかというふうに思います。

ただ一方で、我々もそうした量的なイメージだけではなくて、多少にしても、その質的なイメージが、受講生のイメージとして何か欲しい。それがあれば、拡大に関するモーションのかけ方というもの、それもある程度はやりやすくなる面があるのではなからうかというふうに思っております。こうした立脚点のあいまいさを少しでもクリアにしたいというつもりでこの研究を始めました。

ベースにしましたのは、皆さんのところといいますか、放送教育開発センターが関連、私どもも含めて国立大学に委嘱して毎年行っておりますアンケート調査のデータを利用して、そうした性質が少しでも明らかにならないか。これは受講生に対して何の労働もかけないでというつもりが基本でございます。それで、その性質を少しでもクリアにしたいというつもりでございます。

データを、どちらかという統計的な判断ということになりますものですから、12大学で行われたものを全部並べてというのですか、全部まとめた形で整理をさせていただいております。

結果的には、受講生といいますか、アンケートの中で、アンケートをいただいた数を大ざっぱに半分に割ります。半分に割る際に、受講をよりまじめに聞いた方と、それほどまじめに聞かなかった方ということで、これを受講回数で割りました。受講回数、大体アンケートの数を2分するということになると、後ろの方にちょっと書いてございますけれども、テレビの方がちょうど9回以下と10回以上というところで、大体アンケートの数が2分ができました。そこで2分をしております。

ラジオの方も同じような形ですが、これもやはり9回以下と10回以上で分けたので、ちょうど2分というよりかは、4割と6割という形になりましたが、同じ回数を持ちましたのでそういうことになりました。

それで、使用しましたデータは、具体的には放送教育開発センターが昭和63年度に行った12大学共通のアンケート調査結果のデータでございます。このうちテレビ講座については、高岡短期大学の講座だけが、当時1回30分全9回でしたので、外させていただきました。

それから、ラジオ講座の方は、高岡短期大学と愛媛大学では実施されておりましたものですから、10大学分でございます。

調査対象数が17ページに書いてございますけれども、9,120名ほど、回収率は、テレビの方が49.2%、ラジオの方が41.3%でございます。それで、ただ回収率の方には20.3%から74.3%まで、非常にかなり多きばらつきがございます。この辺のことは通常的なチェックが必要なのですが、今回はやっておりません。また、必要な場合、その後からフォローしたいというふうに思っておりますが、ただ20.3%という最低の回収率は、回収数としてはかなりの数がありました。141名分ありましたものですから、余り悪い影響はないのでないかというふうに考えております。その次の回収率、最低から2番目のは30.3%ありましたものですから、あとのチェックの方は別として、そのまま使わせていただいております。

では、OHPの方に移らせていただきます。

ここに書いてある0回から9回、それから10回から13回というふうに視聴したと、これは本人のもちろん申告であります。それで10回から13回を受講した方をより熱心な人たちと、0回から9回というのがそれほどでもなかった人たち、そうした2つのグループに分かれております。これはもとのデータでございます。このデータを見ただけでも、ある程度のことはおわかりいただけるかというふうに思います。

一番上のところは、これは男女の性別でございます。どちらかという、女性の方が少し上の方に、10回から13回の方に入っている率が少し高いのかなという感じ、男性の方は逆に0回から9回の方に入っている方が多いかなと。多少ですけれども、より女性の方が、熱心かなというふうなことは、ある程度類推がつくわけでございます。

それから、もう少しはっきりしますのは、年齢の項でいきますと、一番下の項は61名と16名ということですから、これは70歳以上になりますと、より熱心な人が多いということになりますし、逆に29歳以下ということになりますと、熱心でない人が多いなというふうなことで、ある程度の類推がつくわけでございます。

これを非常にドライなのですが、数式化をいたします。どういう理由で上のグループに入っているのか。話はどちらかのグループですから、きょうの話は上のグループに入っている原因程度をクリアしようというわけでございます。逆に言いますと、下のグループに入らなかった理由ということになります。

そして、上のグループに入っている原因のところ、一番左側のところに要因と書いてございます。性、年齢、学歴、職業、講座を知ったきっかけ、講座の登録数、それから予備知識の有無だとか、継続的な学習の経験とか、最後のところがスクーリングの出席ということで、13の要因を取り上げます。これで上のグループ、より熱心なグループに入っている要因を分析をい

たします。

分析をした結果がこのようになりました。ちょっと数字わかりにくいかと思いますが、一番こちら側の欄に括弧して1番、2番というふうに書いています。これは影響が大きかった順位を書いてございます。職業によることが一番原因としては大きかった、職業による差が大きかったということを意味します。2番目のところが復習によるものが大きかったということになります。

今ほどで影響が大きかった要因のうち、上の方の8つほど、下の方は大した影響がございません。1つ戻りますが、一番影響が少なかったのが、一番最後に書いてある13位で書いてあります。男女の性別です。ごくわずかだけ出ておりますけれども、一番影響が少なかった要因として上がっております。

それで、話は戻りますが、これは8つのうちで大ざっぱに言いますと、特に学習態度の方に関連するものを4つ取り上げてきたものです。先ほどのわかりにくかった表をグラフにただけで中身は同じでございます。それでやりますと、ごらんいただくとわかりますように、これは非常に常識的な結果が出ております。

例えば、復習は大体した、それから毎回した、少しした、ほとんどしなかった、全くしなかった人というのはマイナスです。ですから、熱心なグループにいる人の中に多いのは、やっぱり復習をよくした人が入っている、これも当然な結果だというふうに思います。

同じように、テキストの予習、それからノートやメモ、予備知識の有無というの、このあたりも大体そういう常識的な結果が出ております。これはこの解析方法がこの分析には適用しても、余り大きい間違いはないなということの判断に使えるというふうに思っております。

時間の関係もありますので、ラジオの表を省略したいのですが、ラジオの方でも全く同じ結果が出ております。これは何度も申し上げたように、この解析方法がこの場合にも適用できるのではないかという、論拠に使わせていただけるのではないかというふうに思います。

それで、問題の対象要因でございます。残りの4つの要因です。ここで見ますと職業という欄が、これは一番大きい要因として上がってきています。優良グループにいる要因として一番大きいのは、職業としては、ちょっと字が小さくて恐縮ですが、中小企業の経営者とか商店主ということになっております。あとはちょっと数字が小さいものですから、それほどの優位性はないというふうに思います。

それから、学歴の方は、よりまじめに聞いているのが、どちらかというとな戦前の学校制度を出られた方でございます。

それから、講座を知ったきっかけは大学からの案内というのが大きくて、人の話というのは余り少ないということです。

年齢から行くと、70歳以上というのが一番熱心な方に入っている。

それから、先ほど省略しましたが、職業の方で、その次に大きいのは無職ないしは主婦、家事手伝いというところが上がってきております。この辺が、後でもう一言申し上げたいというふうに思います。

これが最後のOHPですが、これはラジオに関するものです。これはちょっと違います。というのは、農林漁業が職業の欄であまり熱心でない方が多いというのは事実ですが、このあたり

が違います。先ほどの中小企業経営者とか商店主、その辺が余り影響がない分野に入っています。この辺は、ちょうどまだこの分析が不完全というような気がしております。これはこういう中小企業経営者とか商店主とかいう人たちがお聞きになった番組との関連のチェックがありません。その辺をチェックすると、特定の番組について非常に熱心に聞かれたという結果が出てくる可能性があります。その辺のフォローは今後の問題、課題ということにしております。

学歴とか年齢ないしは講座を知ったきっかけというのは、テレビの場合と多少違います。この辺のところの究明はこれから先にしたいというふうに思っておりますが、総じて申し上げて、先ほどちょっと申し上げたように、熱心な方のグループに入っていますのは、大体女性の場合、無職、主婦、家事手伝い、このあたりです。それから、男性の場合は年配者、一度リタイヤされた年配者の方が多いというふうな、そういうふうなイメージがこの程度の分析ですと何とかわかってくる。

こんな方法で、受講生の質的な内容を少しはわかる、この方法ももう少しちゃんと使っていけばわかるのかなという、1つの試みでございます。あとまたしなければいけないことはたくさんあるのですが、数字というのは非常に冷たく出てまいりますので、それなりに判断がしやすい面もございます。また、いろいろとご意見、ご批判をいただきたいというふうに思います。

以上です。

○司会 (館)

どうもありがとうございました。

このテーマに関しての担当教官は私でございますので、私の方から簡単にコメントさせていただきます。

このテーマに関しましては、北海道大学と新潟大学、それから今ご発表いただいた金沢大学、それから名古屋大学、徳島大学がことしのテーマに掲げてくださりまして、かつ信州大学もご報告をいただいております。お配りしているのを見ていただければわかります。

今の金沢のご発表は、実はセンターの方に12大学からお送りいただきましたものをお使いいただいたようで、センターの方からやらなければいけないような分析をやっていたような形で恐縮しておりますが、ほかの大学は独自の調査をおやりになって、それに基づいて報告をいただいております。

北海道、新潟は、これは共同研究ということで、「双方向」とお名づけになっていらっしゃいますけれども、受講生に質問紙をいろんな形で配布いたしまして、それに対するコメント等を送って、その反応を見る。それと受講生と維持拡大というのとどう結びつくかというご研究をされております。

また、イメージ調査ということで、事前事後に受講生の講座に関するイメージがどう変わるかというような調査をされております。

それから、スクーリングなどを利用されまして、直接に意見を面接でお聞きになるというような試みもされてございまして、実はこれが私の認識によりますと、昨日の第1セッションのご報告のベースに使われていたというふうに思います。

それから、名古屋大学のご報告は、今朝の問題提起の中にありました社会教育機関とのリン

クということで、お使いになっていたと思います。

それから、徳島大学に関しまして、四国7大学のリンケージということでお話がありましたけれども、徳島大学では学習補助情報ということで独自のコミュニケーション紙を発行されまして、これを媒介に受講生とどう結びつけていくかということの研究されています。

それから、信州大学は、先ほどご発言ありましたけれども、中間報告をいただいたのをお読みするところでは、スクーリングに受講登録者以外にも募集したというふうになっていまして、放送公開講座で受講生をどうとらえるかというところに、最初に登録しなかったけれども、その後で受講生としてリクルートされるという初めての試みだと思えますけれども、そういうユニークなご報告もいただいております。

そういうことで、受講生拡大サービスのテーマは、このように進捗していると思います。続いて、授業活用ということで、琉球大学の平山先生の方からご報告をいただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

○琉球大学（平山清武医学部教授）

お手元の資料の43ページから46ページに中間報告のまとめがございます。それから、別紙資料といたしまして、裏表、少し見にくい資料でございますが、それを添えてございます。一応表の訂正等を含めまして、後でお示ししますスライドの主なものをべた刷りしてまいりました。

それで、私どもと熊本大学との共同研究の2年目のデータでございますけれども、昨年の平成元年度の分につきましては、研究報告書25の234ページから263ページに印刷されてございます。使用しましたアンケート用紙は、最後の後ろ部分の257ページ以降に使われましたアンケート用紙と、平成2年度は琉球大学の制作しました「沖縄の地形と地質」、後でお示ししますが、46ページにプリントしてございますようなアンケート用紙を使いまして、アンケート用紙が2種類ということになります。

それで、今回の試みとしましては、他大学の総合利用ということが1つ、それから調査対象は学生を利用しているわけでございますけれども、平成元年度でも一部専門教育の部分を利用いたしました。今回は専門教育部分でのアンケート調査が多くなってございます。

それで、表1を見ていただきますとわかりますように、対象といたしました教材は、琉球大学が平成2年度に制作いたしました「沖縄の自然—地形と地質」、それから熊本大学で制作いたしました「薬用植物」、これは私が熊本大学からのご好意によりまして琉球大学の学生を対象にしたものを本日お示ししてございます。

それから、熊本大学で行われました分は、昭和63年度制作の「音と人間」、それから「水と人間」、これは昭和60年度の制作でございますけれども、現在でも専門教育を主として使われているということでございまして、アンケート調査を実施してございます。

ラジオの部分は、平成元年度に私がつくりました「思春期の心とからだ」を、以前は一般教育で使ったわけですが、今年度は専門教育の部分としてちょっとアンケート調査をした分を報告してございます。

それで、対象のところは、今申し上げましたとおり、専門教育を主として、総数約1,000名の集計ということで、中間報告でございます。

それで、初めにビデオをごらんいただきたいと思えます。

○琉球大学（平山）

ありがとうございました。

詳しいことは、昨日からご置きます実施報告書の方にご置きますので、熊本大学、琉球大学の分の趣旨、ねらい等は詳しく見ていただくといたしまして、それで、若干時間押してご置きますので、まず簡単にプリントを中心にご説明申し上げていきたいというふうにお思ひます。

43ページを見ていただきますと、琉球大学で作成しました「沖縄の自然—地形と地質」につきましては、本研究のテーマにつきましては、テーマにマッチする教材ではないかというふうにお思ひわけで、そこに書いてご置きますように、一般の方々に普及すると共に、大学をはじめ中・高校における教材として活用される事を願って企画された。一応ははっきりしてご置きます。そういうような教材であったわけでご置きますけれども、44ページの方に、4月末時点でのコメントをいただいてご置きます、書いてご置きますけれども、熊本大学の部分を新しい部分ではちょっと追加してご置きます。

それは表2でご置きますけれども、これを訂正していただきますが、要するにアンケートの用紙は、先ほどの末の方に示してご置きますようなことでもありますけれども、この講義を用いた、こういう専門教育の中で、あるいは一般教育の中で用いた結果では、非常に評価が高いというような結果でご置しまして、その理由としては映像によるもの、特徴を生かしたというようなことにつきまして、図1、2等に示してご置きます。後でスライドでお示ししたいと思ひますが、やはり今回のテーマに関しますこの放送教材につきましては、いわゆる専門教育の学生の中から高い評価を得ているということでご置きます。

それで、次に私が熊本大学からお借りして、「薬用植物」につきましては、実は医学部の学生の3年、4年の学生に、先ほどありましたような3回分の評価を求めたわけでご置きます。

この件につきまして、まとめとしましては、表3、新しい部分をちょっと訂正していただきたいと思ひますけれども、表3、それに基づきますと、いわゆる大ざっぱなことを申しますと、教材としての内容のレベル、それから教養課程の単位としての認定、それから専門課程に関すること、大学の講義としての評価、そういうことで、肯定的回答、否定的回答と大ざっぱに分けてご置きますが、図4、図5は、表3を詳しく見た部分でご置きますけれども、やはり科目によって、熊本大学、山口大学での、そういう熊大の教材を使った分等を含めまして、やはり対象と、それから分担テーマと申しますか、それによってやはり評価は変わるわけでご置きますけれども、「薬用植物」に関して申し上げますと、やはり教養課程としての単位認定、それから専門課程としての単位認定、やはり医学部の学生の評価でご置きますけれども、若干ほかの「音と人間」というような部分とすると少し低く出ているのがご置きます。しかし、レベルに関しましては高い評価を得ておるわけでご置きます。

ラジオにつきましてでご置きますけれども、これは先ほど申しましたように、一昨年つくった分を元年度では一般学生に使ったわけでご置きますけれども、今回はやはり医学部の学生に視聴させてみました。この場合、やはりテキストを私持っておったわけで、学部との話し合いで追加してもらいまして、一応配りまして、そしてテープを聞かせる、そしてアンケートをとる、要点講義をしたという形をとったわけですが、2回分しかできなかったわけでご置きます

けれども、表4にございますように、「思春期の性」と「思春期のスポーツ」、それをテレビの場合と同じように、肯定的回答あるいは否定的回答、大ざっぱな集計をしてみますと、やはり大学の講義の中でも、専門課程としての単位認定という部分につきましては、分担テーマによってそのような差もございますし、教養課程としてほぼ過半数以上が単位としては適当ではないかというようなことで、これは医学部の学生の認識でございます。

それで、それを元年度に用いました一般教育の回答を「思春期のスポーツ」という部分で集めて比較したのが図6と7でございます。それで明らかなように、一般教育というのを入学して1、2年の学生、それから専門課程としての2年目、3年目の医学部の学生ということでございますけれども、教養課程としての単位としての認定、あるいは専門課程の単位としての認定、やはり統計的な処理はしてございませんけれども、大きな差があったというようなことでございます。

あと、せっかくスライドを持ってきておりますので、簡単に申し上げますが、スライドをお願いします。

これが沖縄の地形のテキストでございますけれども、非常にいろんな図版、写真等がありまして、いいテキストができておるようでございます。

次のスライドをお願いします。

それで、このように教養課程の部分のほかに専門課程でそれぞれの適用した、分担していた講師の受け持ちの時間で利用していただいたわけで、氏家先生にお願いしたわけですが、このように熊本大学でも人数は少ないのでございますけれども、専門課程としての教材として検討させていただいております。

次、お願いします。

すべてのケースをお示しできませんが、ほかの番組を見たい、あるいはさらにインパクトを与えられるということもございますが、その肯定的で一番いいのは、やはりテレビの機能を生かしたということで、あるいは野外でのそういう映像があるということがございます。

次、お願いします。

スライド流してください。

専門課程の学生からは、こういうふうの高い評価を得ておるわけです。

次、お願いします。

これは、183名のまとめでございますけれども、肯定的な中で一番いいのはテレビの機能をやはり生かしているという評価が高く、あるいは野外での映像が多い、そういうことでこういうような教材につきまして、5科目ですか、ほかの映像も見たいのだというふうなことが出ておるようでございます。

次、お願いします。

これは「薬用植物」、さきほどのまとめです。専門的であったという評価。否定的な回答もこのように17%ございます。どちらでもないというのがどの回答でも多いのです。

次、お願いします。

レベルについても高い評価を得ていると思います。

次、お願いします。

教養課程の部分が40%の肯定的な回答。

次、お願いします。

専門課程ではこういうふうには3分の1と申しますか、若干低くなってございます。

次、お願いします。

これも先ほどの表にございますけれども、大学によって、それからテーマによってこういうふうに分かれるのはしようがないと思いますけれども、大体肯定的なものについて評価を得ておるわけでございます。

次、お願いします。

教養課程ですね。

お願いします。

専門課程の場合。ちょっとやはりこうなりますと、専門課程の方については否定的な回答がふえておるということになります。

「思春期のスポーツ」、さきほど申し上げましたように、元年度、2年度、こちらは教養課程での評価、同じテーマに対してこういう差が否定的な分がちょっと多くなっているわけでございます。

次、お願いします。

専門課程も同様です。

次、お願いします。

最後、それで、講義時間、これは私がとりましたものです、私だけではございませんですが、45分の問題、一応は適当であるというのが多い、30分もやはり20%ぐらい、この辺がちょっと50分の部分もございましてけれども、半数近くが45分でもいいのではないかなというようなことです。

ありがとうございました。

極めて簡単な統計のとり方ですが、読んでいただければおわかりいただけると思います。

ありがとうございました。

○司会（館）

ちょっと時間も詰まってしまったのですが、授業活用というのは、なかなか運営が大変なご研究で、かつ他大学にかかわりましてやっていただいて、教養、専門両方にかかわり、かつ複数大学にかかわってご研究いただいたということで、副題に「大学相互利用の試み」とついておりますけれども、実際にご担当されました氏家先生、野原先生から簡単にコメントをいただければ、と思いますけれども。

○琉球大学（氏家 宏理学部教授）

今、ご紹介あずかりました氏家ですが、これはまだ1回だけで熊本大学、それから山口大学の例が出ます。

実は、昨日北大で、お話を頼まれてまして、北大でも紹介したものが教養であるようです。ですから、来年もうちょっとまとまった結果が出ると思います。

それから、別なことなのですが、先ほどから45分か30分、どちらがいいかという議論がありました。機械的にですね。

私に言わせると、その克服の仕方、2つありまして、1つは、さきほど最初が切れました

けれども、やはりテレビ機能を生かして、ちょうどテーマがテーマですから、水中へ潜ったり、ヘリから撮ったり、いろんな野外での画像をたくさん入れますと聴衆者が飽きません。それが1つです。いわゆる講義調はなるべく排除しました。

もう1つは、講師によって、45分、内容はともかくですけれども、キャラクターとして、持てる人は45分持っておられましたけれども、それはほんの一部で、大部分が2人の講師に頼んでおりまして、そうすると、1人の講師は20数分です。また途中で交代すると。これで視聴者がリフレッシュするタイムを与えた。

そういうことで、45分か30分かというのは、多少今までの議論は少し機械的だったと、多少つけ加えたコメントといたします。

○司会（館）

ありがとうございます。

それでは、センターの若松教授から、ひとつコメントをいただきたいと思います。

○放送教育開発センター（若松 茂研究開発部教授）

私から、今の平山先生のご発表に対して、その内容に特に私はコメントしないつもりでございます。

そのかわりお伺いしたいことは、教養課程としての認定はいいけれども、専門課程の認定としては少し評価が低いという、その原因はどういうところになりますでしょうか。

○琉球大学（平山）

教養課程1年目の学生で、ラジオのことだけに限って申し上げますと、元年度のラジオは、1年目の学生です。今年やったラジオは、専門課程、大学入学してから3年目、4年目、一般教養、そういうような大学の生活の長さ、それからもう1つは、やはりテーマが少し医学的な部分が、身体的な部分がございますので、ラジオに関しては少し厳しい評価があったのではないかというふうに思います。

「薬用植物」、熊本大学から借用したものにつきましては、やはり専門性とかなり一致する部分があるのでないか。実際に薬理も習っていた学生、その件につきましては、少し厳しい評価もあるようでございますけれども、これはまた薬学部、熊本大学でのもしデータがあれば、比較したら、またおもしろいのでないかというふうに思います。教養課程では十分価値ある教材だったというふうに思います。

○放送教育開発センター（若松）

ありがとうございました。

もう時間も押しておりますけれども、私から最後に、OHPを2枚ほど使いまして、1分半ほど、この大学授業の活用に関する研究の背景となる一般的な状況、つまり通常の大学授業ではどのようにビデオ教材が使われているかということについて、現在、研究費をいただきまして、今年度から北大の高田先生、それから今の琉大の平山先生のご協力をいただきながら、全学的な調査をちょっと始めたところでございます。きょうのところはほんのごく一部でございます、予告編ということで、ちょっとご紹介いたします。

これは琉球大学の理学部の事例でございます、大学授業におけるビデオ教材等の利用についての調査を教官と学生を対象に行いました。教官には50名の教官に調査用紙を差し上げ、学

生には 100名に調査表を渡し、それぞれ回収率が教官からは64%、32名、学生からは75%の回収率で75名の回収をしております。

これはまず教官の方であります。上の方からビデオ教材を利用した経験のある・なし。授業中、ビデオ教材を利用した経験があるという教官は全体の41%、つまり6割がないわけで、その教授、助教授、助手のランクを見ますと、非常に数が少ないので、これ自身について云々できないかもしれませんが、傾向としては教授より助教授クラスの方が使っていると。助手が使っていないというのは、多分助手は授業の時間が少ないのだらうと思います。

それから、利用した教材としては、こういう順番で、同僚、関係団体等の制作したもの、それからテレビから録画したもの、それから放送公開講座というのも結構利用されております。それから、教官がみずから撮影したものと。数字が少し読みにくいと思いますが、上から8、7、6、6ということで、放送公開講座もかなり使われているということがわかります。

3番目の学習効果でありますけれども、授業の補助手段、授業の理解、それから学習意欲というような順序で、これは複数回答で、これを指摘した数がこういう順番で多いということで、授業の補助手段としては非常に有効である、それから次は、授業を理解させるのに有効である、それから学習意欲を高めるのに有効であるということになるわけで、37%、33%、22%ということになっております。

では、利用していない先生方はどういう理由かといいますと、1つは、学習効果が期待できないと思うかということ、そうは思わないということです。学習効果というものは、やはり期待できているわけですから。そうは思わないが86%で、表現が少し逆になっておりますけれども、それから次は、準備や利用手続きに手間取ると、これが実は、そう思うが70%近いわけで、ここに問題があると思われま。次は、講座の性格上必要がない、これもそう思わないが50%で、そう思うが38%、これは大体意見が分かれていますけれども、そういうことです。それから、知識の獲得には適さない、これはそう思わないが54%ですから、若干知識獲得には適さないと思われる節があるわけですから。次は、人間味に欠けるとは思わないということでありまして、ここで要するに利用されていない理由としては、準備や利用手続きに手間取るとのことと、それから知識の獲得には適さないのではないかと。講座の性格上不必要でないかというようなことが浮かび上がってきております。

今後、積極的に活用したいかということでは、利用経験のおありになる教官は100%そう思うと、利用経験のない教官については、そう思うが約半数であります。わからないが30%ぐらい、そうは思わないが20%ということになっています。

次は学生でありますけれども、これは学生が受けた経験があるというのは全体の88%で、学年別にはこうなっています。

2番目の利用されたビデオ教材というのは、先ほどかなり同じような傾向であります、テレビから録画というのが1位で、放送公開講座がその次でかなり使われていると。

それから、3番目の感想としましては、やはり授業の補助手段、授業の理解、学習意欲という順序で、これは教官の感想と非常によく相関しております。

大体以上のようなことであります。

○司会（館）

どうもありがとうございました。

これで4テーマのご報告が終わったのですが、ちょっと司会の不手際で時間を超過してしまったのですが、どのテーマでも結構ですので、ご質問がおありになりましたらお願いしたいと思います。

それでは、タイムキーピング的な司会は終わりましたので、福井先生に戻します。

○司会（福井）

若干予定よりも押ししましたけれども、大体先生方のご協力で、大体時間どおりに終わりましたことを大変ありがたく存じます。

このテーマを掲げたということは、それによって結果を蓄積し、それを相互に交流して、研究を高度化していこうということでございます。

そして、平成元年度の分はお配りした青い印刷物の中にありますので、ぜひご参照いただきたいと存じます。

○放送教育開発センター（浜野）

どうしてもということで、ちょっと若干テーマにずれるのですが、放送公開講座の担当をさせていただいて、お忙しい先生、何度もセンターに来ていただいたり、このように集まっていたのですが、センターの所属教官がこういうことを言うのはおかしいのですが、ぜひ数年後には通信衛星等を使って協議できるようなシステムをお考えいただいたら、せっかくこういう放送公開講座ということと、映像に理解ある先生方の集団ですので、有意義なことになると思いますので、発言させていただきました。よろしく願いいたします。

○総合司会

これをもちまして、第3セッションが終了でございます。

先生方どうもありがとうございました。

あ い さ つ

○総合司会

閉会に当たりまして、放送教育開発センター・加藤秀俊所長よりごあいさつ申し上げます。お願いいたします。

○加藤秀俊（放送教育開発センター所長）

2日間にわたりまして、いろいろ貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。

飛行機の時間の関係などもおありかと存じますので、私のごあいさつも簡単に終えたいと思います。

多少唐突のように聞こえるかもしれませんが、最近読みました本で2冊、大変感銘を受けたものがありました。1つは阿部謹也先生の「中世の愛と性」という書物です。もう1つは鶴見良行先生が編集なさった「アジアの道」という書物。両方とも読んでいて、阿部先生はご存じのように、西洋中世史の専門の方ですし、鶴見さんは東南アジアの専門家なのですが、非常にわかりやすく、しかも中身が濃い。読み終わってから、私が気がついたのでございま

すけれども、前者は一橋大学公開講座の講演をそのまま本にしたものでした。後者は上智大学の、同じく開放講座の講義をそのまま活字にしたものでした。

そういうふうを考えてまいりますと、初日の最初に申しあげましたように、今、400近い大学がさまざまな開放講座を行っていて、30数万人の受講生がいる。その中で、私どもの放送利用の大学公開もあるわけでございます。

私どものセンター教官に喜多村和之教授がおられまして、「大学淘汰の研究」という立派な本をお書きになって、立派だけでなく、大変ショッキングな本でございます。このままで行けば大学は、要するに淘汰されて、つぶれるものはつぶれるべくしてつぶれていくのだという、大変啓発的な書物なのですが、今申しあげましたことは、実はひょっとすると、大学公開講座にも淘汰の時代がやや近づいてきたのではないかということをお願いしたいからなのであります。

私は幾つか大学を知っておりますけれど、公開講座を実施してもごくわずかしか受講生が集まらないところもある。逆に、定員300人と言っているのに1,000人来るところもあります。

初日の冒頭に申しあげましたように、放送利用の公開講座は、これが国の予算がついているから、毎年ずっと永遠に続くだろうと思っているのは、これは淘汰の時代というものについて全くこれは鈍感な人の考えることございまして、私ども危機感に常にあふれております。とりわけ毎年の概算要求では、予算確保のための、努力をよく知っております。永遠に続くものではないし、質の悪いものと言っては語弊がございますけれども、余り本気に取り組んでいない、余り効果もはっきりしないというようなものはだんだん淘汰されていこうというのが私の長期的観測でございます。来年からどこの大学が消える、そういう深刻な話ではないのでございますけれども、長期的にはそういうことを多少お考えいただいた上で、今から2、3申しあげます。

つまり、いかにして公開講座の淘汰の時代を生き抜いていくかというための幾つかの知恵でございますけれども、2月8日の大学審議会が自己評価とか、大学のカリキュラムの自由化とか、いろいろ大変斬新な提案をなさいました。

中教審は学校制度部会並びに生涯学習部会、両部会とも、また開かれた大学に向かってという提案を今作成中でございます。

そうなりますと、いよいよ淘汰のための地盤といえますか、これ事態も変わってきて、今までの大学の仕組みではどうも行くまいというふうに思うのです。

大学公開講座に携わっている私どもが、それでは何を今からしたらいいのか、4点だけ申し上げます。

第1番目は、公開講座のための組織の見直しでございます。今回は、北海道大学が担当してくださったわけでございますけれども、北海道大学には放送教育委員会というのがございます。他の大学は省略いたしますが、ほかにも2、3、長期にわたった委員会をお持ちのところがございます。その委員会が中心になって、しかも学長と極めて密接につながっているような大学。それがこうした公開講座の事務を扱ってくださっているわけですが、そうした組織と、それから全大学挙げてこれに協力しましょうといったような体制のできていない大学と、ここにある大学だけではございません。他の大学ももちろんそうでございますけれども、その組織をどこ

にどう位置づけていくかということが、まず第1に、これから大事なことだと思います。

第2でございますが、これも昨日申しあげましたが、大学と、それから公開講座との間の相互の入り込みと申しますか、もっと極端に申し上げますと、公開講座を大学の単位に、あるいは他大学の公開講座を、最後の平山先生のご発表、大変その点で示唆的だったわけでございますけれども、もしもこうしてつくられた映像音響資料といったようなものが、大学の授業の中に生かされる、あるいは聴講生として扱われた受講生たちに単位として付与される。これは大学がみずから決めることができる範囲のことでございます。その自由化をなさいたいというのが大学審の答申なのでございますから、これはこれから大いに進められてよかろう、もちろん著作権、その他問題重なりますが、大学教育との重なりといったようなところに照明を当てること、これが第2点でございます。

第3点は、今年から高岡短大が初めて始めてくださるわけでございますけれども、受講料の有料化による実施と、それに見合うサービスを行うということです。これも大義名分の立った正論でございます。そのパイオニアを高岡にやっていただくわけでございますけれども、こうしたことは将来他の大学にも及んでいくかもしれません。

4番目、これは単位の問題とも関係いたしますけれども、大学の教室の中でもご利用の問題ですが、先ほど30分か45分かというのはいろいろご議論もずっとあったわけでございますが、私が今まで見聞している限りでは、今や視聴覚ライブラリーを持たない大学というのは、これからナンセンスになるだろうと私は思っております。

現在、大学設置審で方々の大学を拝見しておりますけれども、とりわけ私立大学の場合には、必ず視聴覚ライブラリーとその視聴室がきちっと備えられておりまして、先ほどの沖縄の珊瑚礁は確かに本を読めばいろいろわかるのでしょけれども、本を読んでもわからない部分は映像で学生も勉強する、研究者もそれを使うと、これは当然のことだと思います。そうした大学の中での利用といったようなことに、私どもは目を向けていくべきではなかろうかというようなことを考えます。

これから先、また共同研究のことになりますが、北大・新潟大・それから琉大・熊本大というふうに共同研究を進めていただいております。四国大学群の方でも大学群と共同研究を進めたいというご意向があるかに伺っております。私どもセンターの方でもできる限り、わずかでございますけれども、お手伝いはさせていただきます。

その中で、特に私個人の考えとしてお聞きいただきたいのでございますけれども、ちょっと重点的にやらなければいけないことが2つあるような気がいたします。

今ある事柄ともかかわりますが、1つは、受講生のマーケットリサーチの問題でございます。マーケットリサーチというと、大変あくどく聞こえるかもしれませんが、いかにして受講生層を拡大するかという発想の根底にあるのは、やっぱりメーカーの思想なのです。このマーケットリサーチは事前の調査というものなしに大学というのは運営されておりますから、教授会手動型のカリキュラム編成になって、学生のニーズというのは全く無視されている。大学改革はそういうところから始められなければいけないわけでございますけれども、公開講座はさらに自由度があるのです。どういうことを受講生たちは今希望しているのだろうか、その希望をきっちり押さえれば、拡大のための努力はしなくても、おのずからこれは固定客がつくのは当た

り前でございます、市場調査なくして製品開発なしというのは、これはもうミクロの経済学の初歩の初歩、経営学ですね、事後的な受講生拡大とともに、受講生の事前のニーズ調査といったようなことも、これは研究テーマとして成り立ち得ると思います。

さらに大事なことをもう1つだけ申し上げておきますが、ここには経済学の先生がいらっしゃるのとは大変残念なのでございますけれども、放送公開講座の対費用効果、非常にこれは算出の難しい経済の式になると思いますけれども、単に放送したときの視聴者が何人で、コストを頭数で割っていくと幾らになるというような単純なものではございません。その後、学術的に重要なものとして10年、20年使って、また価値の出る部分もありましようから、この計算は決して簡単ではございませんけれども、対費用効果の研究というのも、こうした放送利用、これから我々がやっていく上で、経済学の先生方に少し第三者的な立場からでもよろしいけれども、研究していただきたいなという感想を持ちました。

それから、こうした成果のご発表でございますけれども、もう何人もの先生方のお話を伺って、なるほどなと思ったことはたくさんありました。印象の残ったものから思いつくままに申し上げているわけですが、どれを取り上げてみましても、これは1つの学術論文になるものだと思います。

もちろん、この調査研究報告は、センターの報告書として、その中に数ページの形で元年度がお手元でございますけれども、それ以外のもので50枚、60枚、ちょっとまとまった論文をつくってみたいという先生方には、皆ほとんど客員教授、助教授あるいは研究協力者という形でセンターに関係していただいておりますので、私どもの研究紀要、たまたま多田先生が研究紀要等出版委員長としておられますけれども、いずれ近いうちにご案内が参ると思いますが、どうぞ、そうした発表の場は私ども幾らでも用意してございますので、全国の同僚のために、そういうところにもご寄稿いただければというようなことを考えます。

細かいことですが、最後に2つ申し上げておきます。

福井教授からマニュアルのお話が出ましたが、これは名古屋大学におられまして、今中部大学に移られました織田先生が、「大学にテレビ世代を」という書物をお書きになりました。これは各大学にお送りしてあるはずです。つまり、カメラとどうつき合ったらいいの、ディレクターとどうつき合ったらいいか、非常にいいマニュアルができておりまして、全大学にお配りしてあるはずなので、さしあたりそれはいいことだと思います。

それから、公開の席で、将来的にはテレビ会議の実施という提案がありました。私は、この前、民間と行いまして、大変これはおもしろいと思いましたが、これも対費用効果の問題と、もろもろいろいろ技術的、予算的な問題がありますので、示唆しておきますが、実施してみる価値は十分にあると思います。

大変盛会に終わりました。改めて北海道大学に心から感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。

—— 拍手 ——

閉 会

○総合司会

これもちまして、第8回放送利用の大学公開講座シンポジウムの日程をすべて終了いたしました。

皆様お疲れさまでございました。

なお、皆様にお渡ししてございます名札ですが、お帰りの際、どうぞ受付にお返しくださいますようお願いいたします。

皆様、大変お疲れさまでした。ありがとうございました。